

新任教授のご紹介



学びと出会いを大切に

神経解剖学分野
教授 白井 紀好

2025年9月1日より、新潟大学大学院医歯学総合研究科脳機能形態学分野の教授に就任しました白井紀好です。医学部では神経解剖学を担当しています。新潟という新たな地で、学生の皆さんと一緒に学び合い、共に成長していけることを大変嬉しく感じています。

私はこれまで、脳の発生や神経回路のつくられ方、そして高次機能を支える脳の仕組みについて研究を進めてきました。その根底にあるのは、「ヒトとは何か」という問いです。脳はきわめて複雑で、未解明の知見が多く残されています。解剖学や発生学は、この問いに真正面から向き合うことのできる学問であり、未知の生命現象に少しずつ近づいていく探究の過程こそが、私が研究を続ける大きな原動力になっています。脳の仕組みが明らかになるたびに、今も新しい刺激と学びを与えてくれます。

皆さんが2年次に履修する解剖学や発生学の講義・実習は、覚えるべき内容が多く、ときに負担に感じることもあるかもしれません。しかし、解剖学は医学の根幹を支える学問であり、どの診療科に進んでも、人体の構造を正しく理解していることは必ず強みになります。実習でご献体に向き合う経験は、単に知識を積み重ねるだけの時間ではありません。医学生としての姿勢や倫理観を育てる、非常に大切な学びの場です。実習の中で感じた緊張や重み、そして尊厳への理解を、どうか大事にしてほしいと思います。これらの経験は、将来患者さんと向き合うときに確かな支えとなるはずで

大学生活は、将来の専門性を形づくる「興味の種」を見つけ、育てる貴重な期間でもあります。講義中にふと浮かんだ疑問や、実習での気づき、友人との議論から生まれる小さな発見が、研究や臨床の入口になることは少なくありません。

心に芽生えた好奇心を、どうか大切に育ててください。私たちの教室でも、そうした興味を尊重し、脳の発生・発達やその破綻に関わる疾患に関心をもつ学生の皆さんを、学年や経験を問わず歓迎しています。まずはお気軽にご連絡ください。

そして、大学生活における「人との出会い」もとても大切です。共に学び、助け合い、互いに刺激し合いながら成長していく仲間の存在は、学びを豊かにするだけでなく、将来、患者さんと向き合う姿勢にも大きな影響を与えることでしょう。大学ではこれまで以上に交友関係が広がり、先輩や後輩、信頼できる指導者、さらには異なる背景をもつ多くの人々と関わる機会が増えていきます。医学は科学であると同時に、人と人とが向き合う営みでもあります。患者さんの不安や痛みに気づき、寄り添おうとする姿勢は、学生生活で築かれる多様な人間関係のなかで自然と磨かれていくはずで、多様な価値観に触れ、互いに尊重し合う経験は、医師としての人間性を形づくるうえでも重要な意味を持ちます。私自身も、これまで数多くの方々との出会いに支えられ、助けられながら歩んできました。今日の私があるのは、そうした出会いのおかげだと深く感じています。

新潟大学は、脳の臨床と研究の両面において長い伝統と豊かな基盤を有しています。この恵まれた教育環境のもとで、学生の皆さんとともに脳の構造や機能の本質に迫る学びを支え、人体という精緻なシステムへの理解を深めていきたいと考えています。新潟での学生生活が、将来の自分を形づくる大切な時間となることを心より願っています。脳の不思議を共有しながら、ともに新しい知の地平を切り拓いていければ幸いです。皆さん一人ひとりのこれからの歩みが、実り多いものとなることをお祈りしています。



挑戦を続けよう

がん免疫学分野
教授 金関 貴幸

皆さま初めまして。令和7年7月1日より医学部医学科分子病理学分野・大学院医歯学総合研究科がん免疫学分野（旧分子細胞病理学分野）に赴任した金関貴幸です。学友会は、医学部の学生さんが中心に活動される自治体のようなものとお聞きました。OBの先生方も学友会誌の読者でおられるようですが、ここでは新入生や現役の学生さんに、自身の紹介を兼ねて、メッセージを送りたいと思います。

私は札幌医科大学医学部を卒業しました。学生時代はやりたいことばかりやって6年間を過ごしたように思います。お世辞にも勉学に励んだとはいえず、趣味や交友活動、バイトなど気の向くまま過ごしていました。その後卒業して、日々がん患者の診療に携わるなかで、治らない患者さんがとても多いことを実感しました。医学研究というものを最初に意識するようになったのはこの頃です。たまたま札幌医大にはがん研究で有名な研究室があるということで、がんの謎を解くべく、いちど臨床を離れて大学院で勉強してみることにしました。大学院初日のことはよく覚えていて、今は取り壊された石造り旧校舎の研究室を佐藤昇志教授と一緒にウロウロと回り、クセの強い先輩たちをひとりずつ紹介して頂きました。後で聞くと、この日は教授の着任日でもあったようです。偶然にも大学院生の第一号になったわけですが、教授の口癖は「血を吐くまでやれ」でした。大学院4年間の出来事は割愛させていただきます。

大学院卒後はもう少し深く勉強を続けたいと思い（また、雪の降らない土地に住みたいと思い）、アメリカ西海岸にあるUC Berkeleyの免疫学部門に留学しました。ポスのNilabh Shastri教授は紅茶とジョークが大好きなジェントルマンでした。残念ながら亡くなられてしまいましたが、理路整然とした思考回路とすさ

まじい記憶力を持つ学者の鑑のような方で、毎週ミーティングをするたびに衝撃を受けていたことを覚えています。出会えて本当に良かった恩師のひとりです。Berkeleyではバックグラウンドの異なる研究者たちとの交流も深まり、貴重な時を過ごしました。ぼんやりと研究医として生きていくイメージが湧いてきたのはこの頃です。

7年経ってアメリカ生活も馴染んできた頃に帰国し、あらためて自分のやりたいことに着手しました。不思議なことに、この頃には挑戦したいテーマや具体的な目標が出来ていました。とにかく、がんと免疫の関係をもっと調べて治療に活かしたいと思っていました。そこで病理学も勉強し直しました。幸いなことに、ポスドクや大学院生から学部生まで、一緒に仕事をしてくれる同僚にも恵まれ、研究プロジェクトも順調にすすみ、そして今年から晴れて新潟大学に移り研究室をスタートすることになりました。皆さんご存知のように、この10年間でがん治療は大きく変わりました。ノーベル賞クラスの発見が相次ぎ、がんに対する免疫療法は完全に市民権を得ました。私が学生の時とは状況が異なります。しかし、依然としてがんが最大の死因であることに変わりはありません。個人的にもまだ当初の目的を達していませんので、皆さんと一緒に、新潟大学で新しい発見を目指したいと思っています。

よく学生さんから進路をどうしたらいいですか？と尋ねられますが、とにかく目の前のものに挑戦し続けることをお勧めしています。はじめからゴールがハッキリと見えれば良いのですが、挑戦してはじめて気づくこと、学べることは少なくありません。見える景色も少しずつ変わって行くことでしょう。今は全く想像出来ないような未来が待っているかもしれません。ぜひ挑戦を続けてください。そして迷ったときは心がときめく方にすすみましょう（ただし勉強と努力は惜しまずに）。その経験が糧となりみなさんの将来につながることを期待しています。



良い医師を目指して、 充実した学生生活を

新潟大学大学院医歯学総合研究科 腎研究センター
腎・膠原病内科 山本 卓

このたびは学友会誌に寄稿する機会をいただき、誠にありがとうございます。

2025年1月から新潟大学大学院医歯学総合研究科 腎研究センター 腎・膠原病内科学分野の教授を務めております、山本卓です。講義や実習で学生のみなさんとお会いする機会が増え、とてもうれしく思っています。どうぞよろしく願いいたします。

私は新潟大学医学部を卒業後、新潟大学第二内科に入局し、以来、腎・膠原病内科を専攻し、新潟を拠点に診療と研究を続けてきました。そのため強い新潟愛を持っていると自負しています。

学生時代は水泳部に所属し、中・長距離の自由形を専門としていました。私は速く泳げなかったのですが、速くて強く、そして優しい先輩や同級生、後輩に恵まれ、全学での活動も多く、とても刺激的で楽しい学生生活を送ることができました。アルバイトは家庭教師や塾講師のほか、交通誘導や引越の仕事なども経験しました。特に引越業者では要領がつかめず上司に叱られることもあり、社会の厳しさを身をもって知りました。今振り返ると、部活での練習が、後の診療や研究をコツコツ続ける力につながったように思います。

学生のみなさんにも、学業と並行して、部活やサークル、アルバイトなど、さまざまなことに挑戦してみてください。アルバイトは、ストレスの少ない職場を選ぶのがおすすめです。そうした経験はきっと、社会に出てからのチームでの仕事や、患者さんとのコミュニケーションにも役立つと思います。

私が腎・膠原病内科を専攻したきっかけは、臨床研修中に慢性腎臓病に対する透析療法に興味をもったことでした。研修中に担当した高齢の透析患者さんの長期入院を通して、心不全や血管障害、感染症など全身疾患に対応しながら、安全

に透析を行う難しさと奥深さを学びました。病室や透析室で患者さんやご家族とたくさん話したことも、今では大切な思い出です。

透析療法は、体液や電解質、貧血などの管理と手術を行う高い専門性をもちつつ、内科全般の知識や対応力も必要とされ、さらに、チーム医療の要となる領域です。実習で見ると完成された治療のように感じるかもしれませんが、実はまだ多くの課題があり、日々の診療の工夫や研究の積み重ねが求められています。また、腎疾患や膠原病の治療は新しい薬が次々と登場し、患者さんのニーズに応えられるよう進化を続けています。

専門性を持ちながら、どんな状況にも対応できる内科医は、これからの地域医療に欠かせない存在です。私自身も、みなさんと一緒に学び、成長しながら、よりよい医療を目指していけたらうれしいです。腎臓病、膠原病、そして内科全般に興味があったら、ぜひ気軽に声をかけてください。どうぞよろしくお願ひします！



研究、挑戦、出会い

脂質生化学分野
中津 史

2025年2月1日付けで、新潟大学大学院医歯学総合研究科分子細胞機能学分野（脂質生化学教室）教授に着任いたしました中津 史です。私は千葉大学にて学位を取得後、金沢大学がん研究所、理化学研究所、Yale大学を経て新潟に参りました。

私が基礎研究の世界に飛び込むことになったきっかけの一つは、大学院時代の経験までさかのぼります。当時、マウスのある特定の遺伝子だけを破壊する「ノックアウトマウス作製技術」が徐々に確立されつつありました。難しそうだが面白そうだと感じた私は、ぜひ自分でノックアウトマウスを作成し、その解析に挑戦したいと思い、その技術を持っている研究室の門をたたきました。自分でゼロから行うには、多くの技術を習得する必要がありました。マウス胚性幹細胞（ES細胞）の培養技術、ES細胞の特定の遺伝子を破壊する分子生物学的手法、ES細胞をマウス受精卵に移入する技術、そして受精卵をマウス体内に戻す手技といった多岐にわたる技術です。当然、マウスの手術や飼育などもできなければなりません。自分で作成したノックアウトマウスが無事誕生したときの喜びは今でも覚えています。しかし、生まれただけで満足して終わりにするわけにはいきません。その後は、しっかり解析を行う段階に進みます。当時は、神経細胞で機能する分子のノックアウトマウスだったため、解剖学の先生にご指導いただきながら、日夜、解剖学教室に通って解析を進めました。また、精神科や電気生理学の先生方にもご協力いただき、原因が徐々に明らかになっていきました。最終的に、このノックアウトマウスではシナプス小胞の形成異常によって神経伝達物質の放出が低下し、ヒトのてんかんに似た発作が起こることを見出し、論文として発表することができました。のちに、この遺伝子はヒトのてんかん患者において

変異が報告され、私たちの結果が正しいことも示されました。

この経験から、難しそうに見えても一つ一つクリアしていけば謎が解けるとい
う達成感と醍醐味を味わいました。同時に、解きたい次の謎も見えてきました。
研究ではよくあることですが、1つの成果から新しい謎がいくつも生まれます。
これがきっかけとなり、私は脂質の研究をしたいと強く思うようになりました。
脂質は水に溶けにくく、分析も難しいことから扱いにくい生体物質と言われてい
ますが、その分、まだ明らかになっていないことがたくさんあります。難しそう
だが面白そうだと感じた私は、脂質研究で世界をリードするYale大学の研究室に
参加させていただき、脂質について本格的に研究することにしました。Yale大学
では、顕微鏡を使ったイメージング手法によって解析を行いました。脂質が集合
して形成される生体膜は、細胞膜や細胞小器官の膜を構築するだけでなく、大き
く変形して細胞を動かしたり、小さな膜小胞を形成して物質を輸送したり、細胞
内シグナル伝達の間を提供したりと、実に多様な役割を担っています。こうした
細胞内で起こる様々な生命現象のしくみや機能を、生きた細胞を顕微鏡で観察し
ながら明らかにしていきました。実際に細胞内を顕微鏡で覗いてみると、生体膜
が極めてダイナミックに動く様子を目の当たりにし、強く惹きつけられました。
それは単に「きれいだから」ではありません。生きた細胞が活動するその瞬間瞬
間には、スナップショットでは捉えきれない多くの情報が詰まっています。そこに
探している答えが「ある」と実感できるのです。だからこそ、私はイメージング
の世界に強く惹かれていきました。そして、その一瞬の出来事を逃さず捉えられ
るかどうかは、結局のところ自分次第なのだと感じています。幸いにも、留学中
に脂質を制御する新しい現象を見出すことができ、現在はそのメカニズムと生理
機能を日々研究しています。

これを読むのは多くは新入生の方々と思われそうですが、ぜひ新潟大学でさまざま
な経験をしてみてください。私は、迷ったときは「面白そうか」「難しそうか」
で選ぶことが多いですが、みなさんはご自身の感性で何か面白いものを見つけて
みてください。そして、ぜひ人との出会いを大切にしてください。私自身、研究
の道を歩む中で、多くの先生方や仲間との出会いに支えられ、挑戦する勇気をも
りました。みなさんの大学生活にも、そんな出会いが訪れることを願っていま
す。



医学部生の皆さんへ

新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野
教授 朴 秀賢

このたび令和7年4月1日付で、新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野の教授に就任いたしました。新潟という新しい地で、皆さんと医学・医療・科学について共に学び考える時間を持つてることを、大変嬉しく思っています。

私は高校時代、生物の授業で分子生物学を学んだ際に生命の基盤となる遺伝子の精巧なメカニズムに感動し、生物学に強く興味を持つようになりました。そのため基礎医学の研究者を志して京都大学医学部に進学し、在学中は発生過程に関わる転写調節因子の研究に取り組みました。研究を行う中で、自分の手を通して新しい知見が生まれる瞬間に立ち会うことができた感動は今でも忘れられません。科学的探求が人間に与えてくれる知的興奮と深い満足感を存分に実感することができたのは本当に幸運なことでした。

そこで、卒業後は基礎医学の研究者を目指すべく、大学院でさらに研究を続けました。しかし、友人がうつ病に苦しむ姿を目の当たりにしたことが大きな転機となりました。身体に明らかな異常が見えなくても、人は深く傷つき、立ち上がれなくなる。ではその「心の傷」はどこで生まれ、どうすれば癒すことができるのか。この問いは、私にとって分子生物学以上に解き明かしたい対象となりました。こうして私は精神科医に転向することを決意し、当時、臨床と研究が共に盛んであった北海道大学医学部精神医学教室に入局しました。

臨床では、年代や背景、疾患も様々な方を診療してきました。特に北海道の地域病院では「断らない精神科医療」を目標に、子どもから高齢者まで、急性期から慢性期まで、誰もが頼れる医療を提供することに尽力しました。その後も気分障害を専門とする傍ら、統合失調症、認知症、リエゾン診療など、多様な疾患と向き合い、救われるべき人に確かな医療を届ける責任の重さを常に感じながら仕

事をしてきました。一方で、精神疾患の背後にある生物学的メカニズムを理解したいという思いは変わらず、神経細胞新生やアストロサイト、エピジェネティクスに着目した気分障害の基礎研究を行いました。

さらに研究の幅を広げるべく、アルバート・アインシュタイン医科大学（米・ニューヨーク）に留学して神経細胞新生に着目した発達障害の基礎研究を行いました。その後、神戸大学・熊本大学では神経細胞新生・アストロサイト・エピジェネティクスに着目した気分障害と統合失調症の基礎研究を行うと同時に、ニューロモデュレーション治療（電気けいれん療法、反復経頭蓋磁気刺激療法）をそれぞれの大学で導入し、専門である気分障害に加えて各種依存症の診療や周産期メンタルヘルスおよび司法精神医学に従事するなど、臨床と研究の「両輪」で精神医学に取り組んできました。

こうした各地での臨床と研究の経験を通じて私が確信したことは、「精神医学は、脳科学と人間理解が交わる医学の最前線である」ということです。人間の思考・感情・行動の根源は脳の働きにあります。しかし、その脳は社会や文化、人生経験と切り離されて存在しているわけではありません。精神医学とは、神経細胞の働きから人生の物語までを見渡し、人がよりよく生きるための支援を行う学問です。そこには、他のどの診療科にも代えがたい深い魅力があります。

医学部生の皆さんへお伝えしたいことは、「精神医学は、どんな進路を選んでも必ず役に立つ」ということです。患者さんの話に耳を傾け、背景にある感情と状況を理解し、支援する姿勢は、内科・外科・小児科など、あらゆる診療科で不可欠です。また、AIが進歩する現代においても、「人間そのものを理解する力」は決して置き換えられません。

新潟大学医学部精神医学教室は、地域と共に歩み、教育・研究・臨床の三位一体を大切にしてきた教室です。私はここに、これまでの経験と、新しい発想や技術を融合させ、皆さんとともに次の時代の精神医学を創っていきたいと考えています。もし、少しでも「人の心に興味がある」と思ったら、どうか気軽に扉を叩いてください。一緒に学べる日を楽しみにしています。